大破壊前の科学者(タタラ)が荒野を往くようです。

二代目斬風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
大破壊前の科学者（タタラ）が荒野を往くようです。

【Ｎコード】
Ｎ２１１０Ｚ

【作者名】
二代目斬風

【あらすじ】
ヒャッハー！　ＭＭ２Ｒが明日発売だぜぇ、と長らく物書きから離れていた駄作者が年甲斐無くハッスルしてしまったので投稿されてしまったネタと妄想の産物。
要するにメタルマックスな大破壊前の世界にて、Ｎ◎ＶＡ的な変態技術者達と共に技術チートしちゃった転生者が、大破壊後の荒野でアレしちゃう話な訳です。

【本作品には厨二成分が配合されています。過剰摂取にご注意ください】
【本作品は、メタルマックス世界が基盤となっていますが、余計な要素が紛れ込んでいるため非常にカオスです】
【本作品の作者は基本的に遅筆のようです。生温く見守るのが正解かもしれません】

01話

脳髄を突き刺すかのように騒々しい警報音。点灯する赤色灯。施設のあちこちで重低音を響かせる機銃の音と、何かが爆発(事実、爆発で)したかのような(あろう)振動が絶え間なく伝わってくる。

凄惨な戦場と化した非合法極秘研究(ブラド・イリーガル・テクニカ)施設の地下深く……表には出すには危険に過ぎる研究成果の数々が収められる第十三保管庫に隣接する管制室で、二十代半ば程であろう男が深刻そうな顔つきで操(キ)作盤(ーボード)を叩き続けている。

果たして、男の前に浮かび上がっている複数の投影型(ホロ・モニター)表示装置の中で刻一刻と変化する状況は、絶望的の一言に尽きるものだった。

「まずいな……ノア・ネットワークからの隔離隠蔽が裏目に出たか。まさか大破壊が起こる前に同じ人類に攻め込まれるとはな」

憂鬱そうに呟く白衣の男は、研究者というには随分と立派な体格をしていた。

身の丈１９０ｃｍにも届こうかというほどの大男で、日がな一日頭脳労働に精を出しているであろう典型的な技術者(テンプレート)(テッキー)らしくなく、筋肉が武僧のように隙無く鍛え上げられている。

艶の無い闇夜を思わせる黒色の短髪は、整髪する手間を惜しんだのか無造作に流されているのみで、頬から顎にかけての鋭角には無精髭。必要以上に威圧感と鋭さを感じさせる三白眼気味の碧眼は先程から忙しなく幾多もの画面を行き来し続けている。

薄らと褐色に日焼けした黄色の肌からすると東洋人であろうか？
いやしかし、その割には眉目や鼻梁に西洋人の名残を匂わせる彫りの深さも窺える。
この何人にも見えそうな技術者らしからぬ男。名を真崎九朗（マサキ・クロウ）といい、日系アメリカ人の父と日系ロシア人の母との間に生を受けたという実にややこしい血脈を受け継ぐ日本人である。

「非常隔壁で時間は稼げるが、こりゃ詰んだかね。望みが完全に断たれた訳ではないが……せめて保管庫の黒歴史（やりすぎた代物）だけは処分しておくか。いや、すまんね同志諸君」

ふう、と彼は片手で収まりの悪い髪の毛をかきまわしつつ嘆息。どこか諦めたかのような顔つきで、黄色と黒で縁取りされた赤いスイッチを押し込んだ。
鳴り続ける警報音とはまた違った警告音が管制室に響き渡り、通電する事で透明化、更には物理ダメージの殆どを無効化するなどというふざけた装甲窓（シェルター・ウィンドウ）の向こうに、静かな威圧感すら伴って聳（そび）え立っていた最終隔壁がゆっくりと解放されていった。

「よし！　出力正常。各部及び兵装異常無し。マイスター権限による再起動シークエンス実行。電子頭脳（Cユニット）セルフチェック、プロセス六

十番以降を省略。いざ、蘇れ！　アイアンシェ……もとい。パイオニアＤＸ！」

これまでのシリアスを正面から打ち砕かんと、どう見ても先〇者の同輩にしか見えない全高２．５ｍの神話公司系機人兵が、両目の部分にあるカメラアイを禍々しく光らせて立ち上がる。

真崎九朗と、中国系アメリカ人の技術者であるマーフィー・張（チャン）が古い動画を見て悪乗りした結果誕生したもので、性能だけは凄まじかったがブラド・コーポレーションの商品としては外見的に失格の烙印を押された代物である。

兵装は、左腕部に電磁射出式パイルバンカー。右腕部に１３ｍｍガトリング。背中の武装担架（ランドセル）に二門の小型連装超電磁砲（バースト・レールカノン）。股間に何故かご立派極まりない近接回転衝角（ドリル・ラム）が搭載されている。

更に、たかだか２．５ｍ程度の戦闘用ドロイドになど明らかに不相応であろう極限までダウンサイジングされた常温核融合炉（パラジウム・リアクター）という、気が狂ったとしか思えないような代物を搭載し、転送装置を魔改造することで実現された試製転送式給弾装置が組み込まれ、しまいには何をどうしたのか破損程度のダメージを即時修復（１ターンで）してしまう物質（レス）復元機構（トレーター）なるトンデモ機能の追加など、既存の物理学的常識を事象地平の彼方まで投げ捨てんばかりの超技術（メタ・テクノロジー）が山ほど積み込まれているのだ。

むしろ本体よりも、地底王国（九朗と愉快な仲間達）の変態どもがハッスルした事で生み出された副産物のほうがニューヨーク（ブラド・コーポレーション）本社の重役（エグゼク）達に喜ばれたのは言うまでも無いだろう。

「オハヨウゴザイマス、ゴ主人。ドウゾ、ゴ命令ヲ……」

「ちょっと上の非常隔壁前まで行って、お客（敵軍）さんがこの区画へ侵入

するのを防いできてくれ。なおミッションの成否に関わらず一時間が過ぎたら自爆プロセスを実行しろ」

「任務リョウカイ」

ギピーン！　と何故か効果音を外部に垂れ流しながらカメラアイを光らせた中華壱号は、キモさ全開の軽快（オーバーリアクション）な動作（これはひどい）を見せつけながら走り去っていく。

文句の一つも言わずに任務を開始したソレが視界から消え去った頃、九朗は「さらば。開発（我ら）六課の黒歴史よ……」と小さく呟くのであった。

「さて……アレが時間稼ぎをしている間に準備でも済ませますか」

同志達は無事に脱出できただろうかと、もはや完全に制圧されてしまったであろう上階層を思いつつ、九朗は保管庫の中を見回した。

最大の黒歴史《危険物》は、既に処分（捨て駒にした）した。流石のアレも主力戦車（MBT）や機動兵器（ウォーカー）ならともかく、歩兵隊の機動甲冑（アーマーギア）相手に不覚を取ったりはすまい。

「それにしても幾ら秘匿施設といっても、研究区画に転送装置が無

いとか……いや、確かに技術漏洩やブツの持ち出しとか考えたら無理なのは分かるが、こうなると悪夢だなぁ」

こいつぁ年貢の納め時かねぇ、と獰猛に笑いながら、室内の中央を陣取っている奇抜な装置の電源を投入する。

ヴン、と低い唸りを上げ始めた装置は、翡翠の輝きを放ちながら粛々と稼動手続きを進めていた。

「……おおう、何気に生体実験を自分の身でする訳か」

どこか可笑しそうに肩を竦めてから、装置と電脳を直接結線（コネクト）。拡張領域に密かに保存されていた制御用ＯＳが凄まじい勢いで装置本体――タキオン・テレポーターにインストールされていく。

「初期設定完了。一応、試すか？」

言うや否や、懐から取り出した一本のシガリロを装置に放り込む九朗。

果たして装置はエラーメッセージを返す事も無く、主人の手を離れたシガリロを何処かへと消し去った。

「いいねぇ……何年後に跳ぶか、それとも違う時間軸に渡るかは分からないが、生きる目が出てきたかな？」

ニヤリと鮫が嗤(わら)うかのようなスマイルを見せ、九朗は室内の緊急用端末から、管理者権限を使い隔壁を閉鎖。

白衣と服を脱ぎ捨て、素早くインナースーツに着替えると、危険すぎる素材で造ってしまったが故に、お上に報告される事すらなくお蔵入(永久封印)りとなった機動甲冑(アーマーギア)メタトロンを正気度(SAN値)を削る覚悟で装着する。

次に、幾つかの物騒極まりない武器や道具を格納空間（ベクター〇ップ）に仕舞い込むと、再び取り出したシガリロに今度こそ火を着けて一服した。

「こいつ(メタトロン)を使えば強行突破は容易い。だが、こいつの情報が軍なりノアなりの手に渡ろうものなら、人類どころか地球が滅びかねんか……我ながら何て物を作ってしまったんだ！　タキオン・テレポーターで生体転送できるかも未知数だというのに他に逃げ道が無いとか勘弁してくれ！　ぬう……こうなるなら三課の誘いに乗って浪漫の粋を凝らしたアルファシリーズ開発でもするんだったァァァ！」

おもむろにハイテンションになり叫び始める九朗。早くも危険物の汚染を受けかけているようだったが、はたと正気に返ると頭痛を堪えるかのように呻きながらタキオン・テレポーターの光の中に飛び込むのであった。

その後、太平洋の無人島に存在していたこの施設は、想像を絶する大爆発によって地上から消滅したという。

生き残った兵士の中には、「先〇者キモい。先〇者怖い」とトラウマを植えつけられたものや、「光が、光が押し寄せて……」など

と精神崩壊してしまったものが続出したらしい。

そして、真崎九朗は――

（続く？）

０１話（後書き）

この後の展開は……わかるな？

以降は、ＭＭ２Ｒが手に入ってから書きます（笑）

02話（前書き）

メタルサーガの舞台となった地域に飛ばそうかと思ったが結局こうなった（笑）

０２話

▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
▼△▼△

／＊　おはようございます　真崎九朗（マスター）　＊／

／＊　無線通信網（ホットスポット）が利用可能です　＊／

／＊　新規情報があります！　＊／

／＊　＞！＜最新の時刻情報を受信しました（ＮＥＷ）　＊／

／＊　＜＜ＥＲＲＯＲ！　標準電波と現在時間に重大な齟齬（そご）を発見しました！　＊／

／＊　＜＜自己診断の結果　補助電脳（ＩＡＮＵＳ）に異常はありませんでした　＊／

／＊　＜＜侵入（タッピング）の痕跡は発見できませんでした　＊／

／＊　＜＜現在の内部時刻は　２０２０／１０／２３　１９：２３：５５　です　＊／

／＊　＜＜現在の電波時刻は　２０７７／１１／１１　０８：１５：２３　です　＊／

／＊　＜＜時刻設定を更新しますか？　（Ｙ／Ｎ）　＊／

／＊　＞！＜衛星通信網（サテライト・ウェブ）からの更新情報を取得しました（ＮＥＷ）　＊／

／＊　＜＜位置情報を更新します……　＊／

／＊　＜＜ＥＲＲＯＲ！　地図情報（マップ・データ）に重大な齟齬（そご）を発見しました！　＊／

／＊　＜＜ナビゲーション機能が正常に動作しない可能性：９０％　＊／

／＊　＜＜ＧＰＳ衛星との再リンクを推奨します（重要度Ａ）

＊／
／＊　<<地図情報(マップ・データ)の再取得を推奨します（重要度Ａ）　＊／
／＊　>!<無線通信網(ホットスポット)からの不正侵入を遮断しました（ＮＥＷ）
＊／
／＊　<<ネットワーク名：ＮｏＡ　からのアクセスを検出しました　＊／
／＊　┬通常認証(パスワード)　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　＊／
／＊　┬生体認証(バイオ・メトリクス)　ｓｕｃｃｅｓｓ　＊／
／＊　┌幽紋認証(アストラル・メトリクス)　ｆａｉｌｕｒｅ　＊／
／＊　┌ＲＥ：幽紋認証(アストラル・メトリクス)　ｆａｉｌｕｒｅ　＊／
／＊　┌ＲＥ：幽紋認証(アストラル・メトリクス)　ｆａｉｌｕｒｅ　＊／
／＊　<<Ｃａｕｔｉｏｎ！　不正なアクセス→ネットワーク名：ＮｏＡ　＊／
／＊　<<ネットワーク名：ＮｏＡ　を遮断しました　＊／
／＊　<<ネットワーク名：ＮｏＡ　を悪質なユーザーに登録しました　＊／
／＊　<<Ｃａｕｔｉｏｎ！　１ｓｅｃ　に規定数を超えるアクセスが集中しました　＊／
／＊　<<自動更新及び外部リクエストへの応答を中断します
＊／
／＊　<<再開には　システム管理者権限　によるロックの解除が必要です　＊／
／＊　┬ｂｏｏｔ　ｔｗＣｐ_ＧＰｘｖ２２．ｃｔｐ　＊／
／＊　┌ｂｏｏｔ　ｃｈＣｐ_ＧＨａｃｆｗ．ｃｔｐ　＊／
／＊　<<【ゴーストプロテクト】起動　＊／
／＊　<<【ゴーストハント】起動　＊／
／＊　それでは良い一日を！　＊／

▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
▼△▼△

「嫌味か、おい……」

意識を取り戻すと同時に、脳裏に表示される管制ＡＩ《古臭い文字列》からの報告に九朗は思わず顔を顰《しか》めた。

タキオン・テレポーターなどという、（限定的とはいえ）時空間を越えて物質を転送する高次元存在《ヨグ＝ソトース》も吃驚《びっくり》な代物に、機動甲冑《メタトロン》を身に纏っていたという幸運があったにしても、生身で……しかも五体満足で現世へ帰ってこれたのは僥倖《ぎょうこう》。

だが、軽く見積もっても五十年《電波時刻が正確なら》の時間跳躍など、やはり凹む要素が満載だった。

同系統の科学技術で発展した延長線上の世界であることは確信している。

何よりも、さっそくノアからの干渉があったのだから、これは間違いないだろう。

問題は、今いる世界が自分の生きていた時間軸から直接派生した未来《正史》なのか、それとも時間軸を同じくしながら分岐した可能性未来《ｉｆ》なのか……はたまた、偶さか似た要素で構築されている並行世界《パラレルワールド》なのか。

まあ、最後はなかろう。無いといいなぁ、などと思考を彷徨《さまよ》わせながら危険物《メタトロン》を待機状態《量子化モード》に移行させ、何処からともなく取り出した魔改造白衣《防弾・防刃》をインナースーツの上に羽織る。

肉体にぴったりとフィットするインナースーツ《衛士強化装備っぽい》の上に白衣……彼は気付いていないのかもしれないが、限りなく変態染みたスメルが漂ってくる。

もう少し方向性がアレな方向に遷移《せんい》しようものなら、彼はＭＭ世

界の西博士（キ○ガイ）として名を馳せてしまう事になるだろう。

「時刻設定は更新するか……太陽を見る限り正確だろう。自動更新……といってもＧＰＳ情報は、大破壊で意味を成さないだろうしカット。それにしてもドいきなり侵入（タッピング）とはね……よかった。幽紋認証（アストラル・メトリクス）を開発しておいて本当によかった」

何にしても準備は大切なものだなぁ、と苦笑。そして改めて荒野と砂礫が広がる光景を眺めると、ふと疑問を覚えた。

「ん～？　タキオン・テレポーターが無い……だと？　馬鹿な。必ず受信側の装置に出る筈なんだが……」

そう、あくまで転送は、同じシステムを積んだ装置間でのみ行われる。通常の転送装置（トランスポーター）でも稀に転送事故を起こす事があったが、それでも別の装置の子機へと移送ミスが起こるだけで、普通は何も無いような場所に放り出されたりはしない。

奇妙な胸騒ぎを感じながらも、正しい解答を導き出す事など不可能な事であるため、それを一時棚上げする。それよりも今するべきは、休める場所と水や食料の確保……なのだが――

「何だぁ？」

怪訝そうに目を細める九朗。遠くへ視点を合わせようとする彼の

行動を、機械仕掛（59（ごくう））けの魔眼が即座に望遠拡大。
焦点が合わされると同時に、ターゲットサイトがポインティング。ＬＯＡＤＩＮＧの表示も寸刻すらせぬうちに消え、目標の情報が視界に表示される。

▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
▼△▼△

／＊　＜＜距離：３３５９．２２１メートル　＊／
／＊　＜＜速度：６２．５ｋｍ／ｈ　＊／
／＊　＜＜名称：グラップルタンク　＊／
／＊　＜＜車種：ＢＲＤ－ＬＡＶ２５ｒｅ（装甲兵員輸送車）　＊／
／＊　＜＜所属：バイアス・グラップラー　＊／
／＊　＜＜備考：生体反応…５　＊／

▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
▼△▼△

「ふむん、なるほど。数は装甲輸送車（ＬＡＶ）が四台、それに装甲バス（ＭＲＡＰ）か。それにしてもテッド様、まさか本当に車並みの体格だったとは……おいおい、ＭＲＡＰの天井に座って運ばれてるよ」

砂埃を巻き上げながら失踪する四台＋αの戦闘車両。
もはや人間というカテゴリに含めたくない、巨漢という言葉すら生温い巨人を見送りながら、九朗は考える。

（……荒野と砂地。テッドブロイラーとグラップラー達。輸送バス……まさか、“今”始まるのか？　という事は、向かう先はマド？）

暫時（ざんじ）、原作という単語が脳裏に浮かび上がるが、九朗はそれを即座に頭から消し去った。

既に三十年近くをこの世界で生きてきたのだ。ゲームとリアルを混同するような現実逃避じみた迷いは消え去っている。そう、とっくのとうにだ。

そもそも彼とて人の事を言えた義理じゃない。

非合法極秘研究施設（ブラド・イリーガル・テクニカ）に所属していたという時点で、綺麗ごとなんて口に出す事すら憚（はばか）られる。

「さて、どうするかな……」

ひょう、と口笛のような音を響かせ、一陣の風が砂と枯れ草を巻き上げる。

吹き荒ぶ風に白衣の裾をはためかせながら、真崎九朗は遠く、視界に入らぬマドの方角に目を向け続けていた。

（続く？）

０２話（後書き）

さて、ＭＭ２Ｒでもプレイするかな…

０３話（前書き）

そろそろ硬い文体に疲れてきた。

・原作主人公のターン

03話

時は二十一世紀、それほど遠くない未来。
スーパーコンピューター、ノアの引き起こした<大破壊>によって、人類の文明は崩壊した。

不毛の荒野と化した地上には、ノアに生み出された不気味なモンスターたちが続々と出現し、既に人類の大半が死に絶えた今も「人類絶滅プログラム」を実行し続けている。

崩壊の時より数十年。

わずかに生き残った人々は、廃墟に身を寄せ合い、かつての文明の遺産を食い潰しながら絶望的なサバイバルを続けていた……

「けっ！　どいつもこいつもシケたツラしやがって！」

青白い顔色よりもなお蒼く己の髪を染め上げている男が、甲高い声で悪態をつく。
針金のように細長い体躯の不健康そうな男であった。
顔つきも、男の歪んだ性格を反映するかのような凶相で、粗暴な

振る舞いと相まって幼子が決して懐かないタイプのソレである。

「別に死ぬと決まったわけじゃあねえだろうが！　賞金の使いみち考えるとかよ……ちったあ楽しくやれねえもんかね、ええ！」

閑散としたマドの酒場にわざわざ刻み付けるかのように荒々しく足音を立てながら、彼は何事も無かったかのように瞑目しつつグラスを磨き続けている壮年の男性がいるカウンター席へと腰を下ろす。

「おい！　酒だ、酒！」

あんな連中など知った事かとばかりに、男は壮年の男性（酒場のマスター）から酒（ぶっとびハイ）の入ったグラスを受け取るとテーブル席に座る二人の男に向かって「チッ」と舌打ちを残してグラスを一息に呷（あお）った。

彼の名は《暴走バギー》のガルシア。見た目通りの小悪党（チンピラ）ではあったが、個人所有の車（戦闘用バギー）を持ち、幾らかの賞金首を狩っている少しは名の知れたハンターだ。

そんなガルシアの様子に冷たい視線を送りつつ、テーブルを挟み、金髪碧眼の優男といった風貌のハンターと鋼のように鍛え上げられた肉体を持つ長い黒髪のソルジャーが獲物（武器）の手入れをしながら穏やかに言葉を交わしていた。

「用心棒は四人集めたと聞いた……一人足りないようだが？」

赤染めのバンダナと特徴的な民族衣装を身に纏った巌(いわお)のような顔つきをしたソルジャーが手斧の具合を確かめつつ聞く。
携帯用の砥石で研ぎ澄まされた氏族のトマホーク(伝統武器)は、彼の鋼のように鍛え上げられた腕と比べると、どうにも頼りなく感じるほどだが、彼はこの魂の武器こそが最後の砦だと確信している。
彼の名は《鉄の男》アパッチ。９ｍｍパラベラムやグラップラーどもの５．５６ｍｍ程度なら、軽く生身で耐えられるという”鉄”の二つ名に恥じないタフガイである。

「もう来るはずだ。凄腕のソルジャーがな……」

アパッチの問いに答えたハンターは、《隼》のフェイ。
ハンターだが、ガルシアとは違い、個人所有の車を持っていない。
しかし、そんな彼が《隼》などという二つ名(ハンドル)を与えられているのには、勿論理由がある。
彼は、ハンターでありながら生身による戦闘のほうが得意なのだ。近接では二丁の拳銃で踊るように戦い、狙撃では１２００ｍ先の遠距離から次々とグラップラーの脳天に風穴を開ける。

そんな異端のハンターたる彼は、自らが口にした飛び切りの凄腕(ホットドガー)の横顔を思い出して、僅かに頬を緩める。が、次にカウンターでくだを巻いている酒飲(チンピラ)みに眼を向けると、今度は凍りつきそうなほどに透明な冷笑を浮かべる。

「酒ばかり飲んでる賞金目当てのカスとは一味違うヤツだ」
「んだとォ！　こらァ！」

瞬間、カウンターのガルシアが沸騰し、丸椅子を蹴倒しながら立ち上がる。
一触即発といった空気が流れ……それを打ち払うかのように、入口の扉が大きく開かれる。
そこには女神と見紛(みまが)わんばかりの、硬質な美貌を持った女が立っていた。
鋭い眼差しと、凛とした雰囲気を身に纏う血のように紅い髪をした女ソルジャーだ。

「マリア！　来てくれたか！」

今までの空気を無視して歓迎の言葉をかけるフェイに、白けたような視線を向けるガルシア。その両者を気にも留めずに、美しき女ソルジャー……マリアは自らが連れてきた少女へと声をかけたのであった。

黄金を溶かし込んだかのような金髪と、冬の湖水のように……或いは氷河のように神秘的な静謐さすら感じさせる色合(アイスブルー)いの瞳。

１６０ｃｍほどの細身で小柄な姿は、貧相にも見えるが、そう見えた者は今一度、目を皿のようにして少女を見ると良い。
こと戦い、生き延びる事に関しては厳格（スパルタン）かつ過酷な育ての親（マリア）によって施された英才教育により、うら若き少女（ティーンエイジャー）でしかない少女の身体は、引き絞られた弓のような緊張感すら感じさせる猫科（スレンダーな）の獣の如き強さと美しさを秘め、どこか悪餓鬼のような不適な表情には、将来を期待させる美の片鱗と生命力が溢れている。

「レナ。よろしく」

たった六文字で挨拶を済ませる少女（レナ）に、ガルシアは性質の悪いジョークを見せ付けられたかのように冗談じゃねえぜと呟いた。
いかにもな小娘（ヒヨッコ）を引き連れた保護者（女）が凄腕の戦力？　バカバカしい。
こいつは傑作だ、とガルシアが腹を抱えて笑っていると、そこに近づいてきたマリアが強烈な一発（拳）をぶちかました。

「そういえば、まだ挨拶してなかったからね。これがアタシ流の挨拶だよ！」
「てっ……てめえッ！」

細身とは言え、成人男性を水平に五メートルも吹き飛ばす一撃を食らっていながらも、何気に元気なガルシアは、屈辱に顔を歪めながらゆらりと立ち上がる。
この女……思い知らせてやる！　と拳を握った瞬間に、遊びの時間が終わった事を知らせる叫び声が上がる。

「来た来た来たーーーッ！　奴らが、グラップラーが来たぞぉぉぉ！」

町中に響けとばかりに叫びながら、青年がマドの町を駆け抜けていく。

フェイは愛用の双銃と軍用機関銃を手に闘志を燃やし、アパッチはマシンガン（UZI）や手斧を持ち、切り札のグレネードランチャー（RPG-7）を背負うと静かに椅子から立ち上がり、表へと足を向ける。

「おう、女ソルジャーさんよ……後ろから撃たれねえように気ィつけな！」

ガルシアだけがニィ、と気味の悪い笑みを浮かべて罵声を残しつつ外へと出て行ったが、マリアは当然のようにそれを無視していた。

マドの町に集められた用心棒達の戦いが幕を開く……

「……あれ？　私、空気？」

ちなみに、黄金（レナ）の少女は淋（さび）しそうに酒場を出た。

（続く？）

０３話（後書き）

原作通りの展開か、それともブレイクか……それが問題だｗ

０４話（前書き）

・用心棒無双！
・それは死亡フラグだよ！

04話

「人間狩りだぁぁぁ！」
「グラップラーが来たぞーっ！」
「ひーっ！　神様ぁ！」

口々に悲鳴を出しながら、マドの町の住人達が町外れにあるマンホールへと飛び込んでいく。何故にマンホールなのかというと、そこが緊急時の集合場所（避難シェルター）になっているからだ。

「ハッハァ！　カモが鉄砲しょってやってきやがったな！　まとめて轢（ひ）き殺してやるぜっ！」

先程の鬱憤（うっぷん）の全てをグラップラー（悪鬼）どもにぶつけてやるとばかりに気勢を上げて、自らの愛車（バギー）に乗り込むガルシア。
マリアは、そんな混沌とした町の様子やガルシアを尻目に、自らの連れであり、喪った親友から預かった大切な娘であるレナに目線を合わせる。

「レナ！　ヤバくなったら、おまえだけでも逃げるんだよ！　それが生き残るコツだ。わかったね！」

大きな戦いの前には必ずやっている確認の儀式。レナもこくりと

頷くが、彼女がマリアを見捨てて一人で逃げる事は決してないだろう。
そんな娘(レナ)の内心を見透かすかのようにマリアは、改めて「わかったね？」と念押ししてから、戦闘前の触れれば切れるかのような鋭気を放ちだす。

「マリア！　賞金が手に入ったら……その子と、オレと、三人で一緒に暮らさないか？」

目だけは土煙を上げながら近づいてくる集団に合わせたまま、フェイはマリアに声をかけた。こんな時に、この男は何を言っているのかと内心苦笑を浮かべながらも、マリアはアパッチの「……来るぞ」という抑えられた低音に重ねるように「生きてたらね」と短く返した。

しゅるしゅると風を切りながら飛来してきた無数の砲弾が、マドの町に破壊の雨を降らす。重力に後押しされ、威力を増した砲弾たちは町の随所に突き立つと同時にその身に秘めた力を解放し、あちらこちらに小さからぬ爪痕(クレーター)を刻んでゆく……
町で最も大きかったモニュメントである植物プラントの半球状をした屋根が一瞬で粉々になり、幾つかのささやかな暮らしが営まれていたであろう小さな廃墟が、今度こそその歴史に終焉をもたらさ

れ、ただの瓦礫として散らばった。

「ヒャッハー！　狩りの時間だァァ！」
「て、抵抗しても、む、無駄なんだなっ！」
「燃料や食料もイタダキだぁ！」
「もちろん金もな。いひひひっ！」

そして、破壊された防柵から町中に数台のクルマ（LAV）が突っ込んでくる。
蹂躙（じゅうりん）への期待に醜く顔を歪ませ、バイアス・グラップラーの人狩り部隊が我が物顔でマドの町へと降り立った。

「殺せ殺せーーーっ！」
「ヒャァァァ！　グラップル（レベル？）スーツ（ボディアーマー）に豆鉄砲なんざ通用するかァァァ」
『ハッ！　ノータリンめ。この距離で７ｍｍ機銃が防げるわけねーだろうがッッ！』
「……ゲスどもが！　お前らにはコイツ（5.56mm）ですら贅沢ってもんだぜ！」

奇声を上げ、手にした銃を乱射ながら突撃してくるグラップラー。

遮蔽すら無視して鉄火の前に飛び込んでくるのは狂気の沙汰としか思えない所業だ。

そんな獲物(カモ)達に対し、外見や言動の割に冷静な目でガルシアが吼える。彼の言ったように、いかにグラップラーどもが大破壊前の技術で製造されたボディーアーマーを身に着けていたとしても近距離からの副砲を無傷で耐え切るなど無理な事だ。

所詮はアパッチのように鋼鉄(チャクラ)のタフガイですらない雑魚ども……機銃弾の衝撃で防具の下にある脆弱な肉と骨が打ち砕かれ、瞬く間に絶命する。

そこに、防衛戦のためか常に愛用している二挺拳銃ではなく、多(60)弾装(発マガジン)のアサルトライフル(AK-107)を手にしたフェイ(カブトワリ)の魔弾(必殺の矢)が無慈悲に、そして正確に生き残った者達に永遠の休暇(ヘッドショット)を届けていった。

「うげぇっ！　な、何だコイツら……つ、強えぇぇぇ！」
「あべしっ！」
「たわばっ！？」

無論、ガルシアやフェイだけでなく、視点を変えてみればアパッチとマリアも獅子奮迅どころか、無双の活躍をしていた。

下っ端グラップラーのキャリコM950(9mmパラベラム)ごとき避ける必要すらない、とばかりに片手で急所だけを庇いながら、逆手のマシンガンで冷静に装甲の無い顔面を弾けた柘榴(ざくろ)へと変えていく。

そして、マリアはマリアでアマゾネスの異名に相応しく、冷徹で容赦無用の殺戮を振りまいていた。

撃てば確実に相手のどこかに風穴を開け、敵の攻撃はまるで蜃気楼のようなステップで掠らせすらしない。見る間にグラップラー達はその数をすり減らしていった……

「……こりゃ俺のお節介なんぞいらんかな」

マドに程近い場所にある丘陵地にて、白衣に仕込まれた熱光学迷彩（ステルス）機能で身を隠し、悠然と戦況を眺めていた真崎九朗は、顔を劇画調に変えながら呟いた。

無理も無い。眼下では、明らかな戦力差である筈のグラップラーたちが、たった四人＋αの用心棒に、あわや全滅というような領域まで被害を受けているのだから。

九朗とて、幼少の頃から洪邦富（ハン・バンフー）という拳法と気功（生粋のチャクラ）の達人に師事しており、研究職（タタラ）という事で錬功の時間が半減したのを差し引いたとしても十分な戦闘能力は維持していると自負している。

が、こと戦闘経験という部分では眼下の四人に及ぶべくも無い。もし、彼らの二人にでも囲まれたら、よい所までは食いつけそうだが、最後はアッサリと敗れるだろう。

まあ、流石に一対一（タイマン）で負ける気は無かったが。

「お、どうやらテッド様が動く気になったようだな。問題はテッド様がどの程度の化け物かによるが……ふむ、念のため距離を詰めておくか。狙撃手（カフトワリ）でもあるまいに……デカブツとは言え、動き回る対象を精密狙撃するのは手に余る」

ちなみに、彼が今保有している武装(危険物)で精密狙撃ができるものなど、そもそもからして無いのだが。

この距離だと最小火力(小型核熱線銃)でも、連中が戦っている戦域ごと灰にしてしまうだろうし、最大火力(原子分解砲)に至っては、マドの町そのものを消し飛ばしてしまうだろう。

どうしてもと言うのなら、精神汚染兵器(メタトロン)の固定武装(エネルギー兵器)をぶっ放すという手があるが、アーマーギア(人間サイズ)として試作されたがゆえ、エネルギー源を外部からの転送供給で補っていたのが災いし、現在はエネルギーの余裕が無い状態だ。無論、この大破壊から五十余年の歳月が流れた世界に、極めて高度な整備技術が必要となる転送式電力供給網(サプライ・ネットワーク)が生き残っているとは思えないし、当然ながら再供給の目処が立つはずもない。

何より、現時点ですら空間格納(ベクタートラップ)でエネルギーが目減りし続けているのだ。いかに待機モードで節電したとしても早晩、電力切れでアーマーギアは転送蒸着(クイック・エクイップ)すら不可能となった重いだけの鎧と化し、格納されていた諸々の物品は圧縮を解かれて辺りに投げ出されるだろう。

いわんや、今、メタトロンによる狙撃を敢行するという事は、行き着く結果が早まるという事である。

危険物はいっそ使用できないように解体するなり埋めるなりしたらいいだろう。しかし、せっかく過去から持ち込んだ便利な道具や貴重極まりない資料の数々を、みすみす失わせるという選択を九朗は選べそうに無かった。

故に九朗は、敢えて危険を選びマドへと走り出す。

生身の人間とは思えない速度で。しかし、熱光学迷彩(ステルス)は持続させ

たまま。

この男……危険だと思ったら、そのまま消える心算(つもり)に違いない。

（続く？）

０４話（後書き）

・汚いなさすがクロウきたない
・レナちゃんは今日も空気でした（涙）

【作者の妄想】
クロウ　（タタラ◎　チャクラ　※ハイランダー●）※転生者的な意味で。
・肉体派科学者？　技術チートのくせに武力まで持つ節操無し。
ガルシア　（カブキ　カゼ◎　レッガー●）
・ラッキーハンター。しかし本質的にはやっぱりチンピラ。
フェイ　（カゼ◎　カブトワリ＝カブトワリ●）
・レンタルタンクの愛好家。でもやってる事はゴルゴ（笑）
アパッチ　（カブト◎　チャクラ＝チャクラ●）
・この肉体で君達の攻撃は防ぐぞ！　必殺技はトマホークブーメラン（爆）
マリア　（カブト◎　カゲ●　カブトワリ）
・レナの保護者。本作ではＮＩＮＪＡじみた戦闘能力の持ち主。

次回、暴れん坊将軍テッドさん！　をお楽しみに（ぇ

０５話（前書き）

・テッド様、大暴れ！
・この世界の異名持ちは超人揃い
・レナ、空気脱却なるかっ！？

05話

身の丈四メートルにも及ぼうかという人間の領域を激しく逸脱した巨体が、鈍重さを感じさせない軽やかさで宙を舞う。
鈍い地響きすら感じさせ、その常識外の筋肉が着地の衝撃を完全に吸収。巨人には弱点とも言える膝は、一体どのような素材で構成されているのか軋み一つすらあげずに己が主の超重を受け止める。

着地点の大地が無数の罅割れという声無き悲鳴をあげる。
真っ青な耐熱装甲服（グリルウォーカー）で全身を包み、成人男性ほどの大きさがある特殊合金製の燃料ボンベを軽々と二つも背負いあげている様を見て、恐怖や圧迫感を感じないものなど数えるほども存在すまい。

「用心棒として雇われた賞金稼ぎどもか……こざかしいマネを！」

ただでさえ凶悪極まりない疵顔（スカーフェイス）を不機嫌そうに歪め、グラップラー四天王の一角たるテッド・ブロイラーは吐き捨てた。
その怒気で大気すら揺るがせながら、四人の用心棒を琥珀色の凶眼で見据える。

「我らバイアス・グラップラーに逆らう者には、死あるのみ！　ここでオレに出会った不運、悔やみながら死ぬがいい！」

がががーーー！　と特徴的な雄叫びを放ち、焼滅（テッド・ブロイラー）の巨人は、赤い（に付いた）手甲（放射ノズル）から炎を撒き散らし始めた！

初めは、やはりガルシアだった。いかに人外じみた怪人だろうと、対人ならぬ対物に用いられるような主砲には敵うまいと、猛然たるラッシュを始めたが、蒼き巨人（テッド・ブロイラー）は些かの痛痒すら感じていないかのように泰然と主砲の一撃を受け止める。

しかし、わざわざ何度も戦車砲をその身で受け止める気は無いのか、邪魔な羽虫を見るかのような目をしたかと思うと、己の頭頂に生える雄鶏の如き鮮やかな赤いモヒカンに両手を添え――

「モヒカーーーーン、スラッガーーーーッ！」

声高に叫ぶと、モヒカンの中に仕込まれていた禍々しい鈍色を見せるソレを投げ放った。

巨人の手から放たれた歪な刃は、主の手元から離れるや否や信じがたい軌道と加速を見せつつ、燕のように飛翔。

不吉な予感を感じたか、まるで慣性の法則を何処かに置き忘れたかのような挙動で回避行動をとるガルシアの努力を嘲笑うかのように横腹から喰らいつく。

金欠ゆえに装甲（反応式PS装甲）タイルをケチっていたガルシア号（不幸なバギー）のシャシーは、高周波音を響かせる歪刃によって、前後に分断するかのように両断

される。おまけとばかりに天井部分の砲塔すら巻き込んで。

「な……俺のクルマがッ！？」

ふざけんな、この出鱈目野郎が！　と悪態交じりにガルシアがご臨終（切りにされた）を迎えた愛車から這い出る。

慌てて化け物から少しでも距離を取ろうと建物の陰に滑り込んだ瞬間。思い出したかのように暴発した特殊砲弾が彼の愛車（輪）に止めを刺した。

幸いにも電気駆動装置（テスラモーター）を作動させるためのテスラセルが収められた部分やエンジン本体は無事そうだが、電子演算部（Cユニット）や武装（大破壊前の遺物）は全損。

再び荒野を走れるようになるまでに修復するには些かならぬ労力を要求される事だろう。

「くそっ……バケモノめ！」

「俺が時間を稼ぐ！　その隙にヤツを！」

幾ら撃ち込んでも大したダメージを与えられない豆鉄砲（UZI）を投げ捨て、アパッチが愛用の手斧（トマホーク）に埒外（氣）の力を注ぎ込む。

どこか薄らと輝きすら纏ったかのようなそれを手に、守りを捨て、暴風の如き猛攻でアパッチはテッド・ブロイラーに肉薄する。

……が、この巨人はそれすらも他愛の無い児戯を弄するかの如き気軽さでそれを凌ぎきった。

焦れたアパッチは、いよいよ覚悟（乾坤一擲の）を決めた一撃を全霊を込めて放つ。

「くらえぃ……トマホォォォク！　ブゥゥゥゥメランッ！」

ズドン、と音すら置き去りにする勢いで猛烈な回転モーメントを与えられ、滑空砲すらも凌ぐ威力を秘めた手斧が空を裂く！

無双の剛体をもつ魔人（テッド・ブロイラー）も、これを避けるのは不可能と悟ったか、全力で以って対峙する。

激音！

壮絶な力と力の接触に天すらも震撼（しんかん）する。

流石に無傷ではいられなかったのか、五体から鮮血を流しながらもテッド・ブロイラーは口元にニタリと弧月を浮かべた。

切り札を凌がれたアパッチ。

しかし、彼の目は決して欠片も絶望の色を浮かべてはいなかった。

そう、何故なら――

「――これで終わり（coup de grace）、だ！」

フェイの狙い済ました一撃が火を噴いた！

「――――■■■！！」

タイミングは完璧。絶対に仕留（殺った）めたとの確信を胸にフェイは軽く笑みを浮かべた。

しかし、この化け物が……規格外の怪物が、そう簡単に終わるのか？

否、それは断じて否である。

――見よ！　この魔人は、あろう事か己が歯で必殺の魔弾を受け止めてみせた！

「なっ！？」

驚愕の面持ちで、一瞬だけフェイの意識に空白が生じる。そして、その隙を見逃すほどテッド・ブロイラーは甘くは無かった。

「まとめて消し炭だがががーーーッ！」

劫（ごう）。と、周囲全てを煉獄へと変える致死の劫火が渦巻いた――

「フェイッ！」

瞬間、マリアは信じられぬ速度で加速する。
オリンピックの世界記録などという生易しい速さではない。
影すらつかませぬ、正真正銘の魔速。それを以って、フェイを押し倒すかのように劫火の渦から脱出する。

「うわぎゃあぁぁぁぁッ！」
「――ッ」

しかし、マリアの手が届くのもそこまで。不運にも劫火に巻き込まれたガルシアとアパッチが、焚火に投げ込まれた枯れ木のように強制的に人間松明へと変えられる。
声にならない苦鳴を口中で噛み殺しながら並外れた膂力で勁を放ち、体中に纏わりついた炎（ゲル化ガソリン）を強引に鎮火させたアパッチだったが、そのような常ならぬ力など持たぬガルシアにまで、それを期待するのは酷というものだろう……
悲痛な叫びも束の間で消失し、《暴走バギー》のガルシアは、見るも無残な物体（消し炭）となって荒野へと散った。

レナは、眼前で行われる熾烈な戦いに恐怖していた。

彼女とて、今まで戦いを経験しなかった訳ではない。この弱肉強食の論理が支配する荒野では、どこかに必ず人間の悪意が潜んでいる。

何よりも、見目麗しい女の二人組が、悪党どもの目に留まらないことがあるだろうか？

荒野をうろつく殺人モンスターを狩って町に帰れば、身の程知らずの小悪党どもに目を付けられ、或いはこの辺で幅を利かせているグラップラーの人狩りどもに襲われる。

そうした経験を積んでいれば、悪党相手とはいえ齢十五の小娘としか言いようの無い彼女ですら、両の手では数え切れないほどの同族（類）を手に掛ける事になるのだ。

無論、彼女の恐怖感は、そのあたりから来たものではない。（同族殺し）

レナはマリアと旅をするなかで、荒野で生き抜く力を手にしたと思っていた。

理不尽な暴力に……不条理な運命に抗うだけの力を手にしたと思っていた。

ヒヨッコながら、ハンターと名乗れる程度の力を手にしたと思っていた。

しかし、この戦いは何だ？

人間とは思えない炎の巨人（怪物）を相手に、今まで見せたことの無い全力（とは思えない戦闘能力）中の全力で戦う育ての母（マリア）。

憧憬の念すら抱いている高名（フェイ）なハンターは、マリアと比べれば凡庸ながら、射撃に関してだけは人間業とは思えない冴えを見せる。

鉄の男（アパッチ）など、本当に同じ人類なのだろうかと思えるような身体能力で、ソルジャーを名乗るためにはアレぐらいの人外でなければならないのかと思うと、ちょっとはマリアの役に立てるようになったのかな？　何て考えていた自分が恥ずかしくなるほどだ。

小悪党（チンピラ）にしか見えなかった賞金稼（ガルシア）ぎですら、クルマを扱っていた時の動きは、まるでクルマが生きているんじゃないかと錯覚させられるかのような、ある種の芸術性すら感じさせる腕前を持っていた。

「あの時と同じだ……」

レナは呟いた。

記憶の奥底から、あの日の光景がフラッシュバックする。

もはや名前も思い出せない故郷で、父と母はバイアス・グラップラーの人狩りから自分を逃がすために抵抗して、無残に……無慈悲に殺された。

そう、力の無い私を庇って、殺されたんだ……

そして、彼女の目の前で炎に包まれたガルシアが人の姿をした黒いナニカへと変貌する。

アパッチは全身を炎で焼かれながらも、身を焼く炎を鎮火させようと奮闘している。

マリアとフェイは炎を避けるために取った行動のせいか、抱き合うかのように倒れこんでいる。

怪物（テッド・ブロイラー）が、ムカつくほどに白い歯を剥き出しにしながら、片膝立ちで、両手を真っ直ぐ伸ばし――

（マリアが、死ぬ……？）

ドクン――

心臓が脈打つ。

レナの手がボウガンを構える。

ドクン――

何をしようと言うのか？

こんな、か弱い弓矢如きで、あのバケモノをどうにかできると？

ドクン――

気を引くな！　アレに目を付けられれば絶対に死ぬ！

本能とでも言うべき何かが身体を縛ろうとする。

だが、その程度でレナの手は止まらない。

レナが本当に恐ろしいのは……

「うわあああぁぁぁぁぁッ！」

力の無さゆえに、自分の大切な者が死んでしまう事なのだから。

（続く？）

０５話（後書き）

我ながらテッド様を偏愛しすぎな気がするがががーーー！
テッド様に力を入れすぎて思わず賢者状態になってしまったぜ……
ふぅ。

はて、そう言えば誰か忘れているようなｗ

テッド様（ヒルコ●　クグツ◎　チャクラ）
・グラップラー四天王なのでヒルコかつクグツ。特徴＝暴虐・冷酷・最強ｗｗ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2110z/

大破壊前の科学者(タタラ)が荒野を往くようです。

2011年12月11日18時52分発行